

## シコウの物語

### 常磐 誠

とある国へと続く平坦な道を、一台の車が走っています。運転席には二十代中頃の若々しい背格好をした短髪の男は端正な顔立ちをして座っています。

「見えてきましたね」

隣に座る、黄色の髪をした女性が口にしました。運転席の男は無言で首を縦に振ります。穏やかな表情からは、自身を含め六人が乗り込む車を無事に次の国へと運ぶことができたことへの安堵が感じられました。そんな男の顔を見て、助手席の、いましがた男に話しかけた女性も、穏やかな顔のまま前方の景色へと目を向けます。その時、

「次の国はどんな国なんだろうーねー？」

という若干間延びした、呑気な少年の声が車内に響きました。その声を受けて女性は左の耳に手を当て答えます。

「隣国曰く、自由に身分を選べる国、だそうですね。マウロ」

「そっかー。よくわかんないけど自由ってサイコー」

テンションを少しばかり高ぶらせた様子でマウロと呼ばれた少年が答えて少し後、

びーっ！ びーびーびー！ という笛の音と、

「マウロ！ てめえふざけんな俺らが背中に乗ってるの定期的に忘れんじゃねーよ！」

という、マウロと比べるとやや生意気さを感じさせる少年の正当な怒鳴り声が聞こえませんでした。

「アクロバティック？ たまにはそんなスリリングさも必要……」

『びっ！』

「ねえよ！」

何だかんだで息のあったやり取りを六人は車内でスピーカー越しに聞いていましたが、聞き飽きたやり取りなので最早何も口を開くこともなく、車は国の城門のそばへとたどり着きました。車の接近を関知してか、城門はゆっくりと大きな音をたてながら開いてゆきます。

「ユタカさん、運転お疲れさまでした。マウロ、飛行お疲れさまでした」

車外へと降り立った黄色い髪の女性がユタカとマウロにそれぞれ声をかける。ユタカは軽く手を振り、それほどでも、というメッセージを送り、マウロの方は、

「まあこれくらいの飛行はぜんっぜん疲れないからへーきへき」

と言いました。

「お前が度々揺れたり回ったりするせいで酔いそうだったけどな！」

『ぴっぴっぴ！』

マウロの背中に張り付いていた少年と笛で相槌を打つ少女が抗議をしました。この二人は揃って栗色の髪をしていて、瞳は琥珀色。お揃いの黒いローブを着ており、背丈も同じくらいなら顔も瓜二つときています。つまり双子です。

双子から揃って抗議を受けたマウロでしたが、ぶくすくす、とわざとらしいジェスチャーをして彼は、

「あらやだギースったらな、ん、じゃ、く！」

右の耳からヘッドセットを外しながらマウロはギースにだけ、悪口で返しました。

ギースはそんな反省知らずのマウロの態度にカチンときた顔をしましたが、

「ほい。これお前とキーサの荷物な。さっさと行くぞおら。歩け」

そんな風に後部座席に座っていた男から制されてしまい、舌打ちだけしかできませんでした。

「行こう。キーサ」

色んな感情を胸にしまったのが丸わかりな表情で、ギースは荷物を手に持ち、妹の手を取り歩き出しました。

「入国の際には？」

その後ろでは黄色の髪の女性が確認の声を発し、

「おとなしくしてますまあーす」

飽き飽きとした声を返すマウロが続けます。そして、

「っていうかさー、マユナ。もうそれ耳タコなんだけどー」

と抗議しました。しかしマユナは、

「そういつて大人しくなんかできた試しがないのがマウロです。……ですよね？」

顔は笑顔で、だけどしっかりと右手でマウロの鼻を摘みながら言います。

「はにやをちゅみやみやにやいで。……いやいや！ 今回は大人しくしてるし！」

そう胸を張って言っていたマウロでしたが、

「ナ、ナンダッター！」

入国審査開始五分でマウロは大絶叫してしまうのです。その辺りのやり取りなのですが、

「……………」

入国説明資料とにらめっこをしながらマユナが難しそうな顔をしていました。入国審査官が説明します。

「入国審査の手数料として十八歳以上の男性、女性、十八歳未満のお子さま、そしてペット、という区分で料金が異なります。手数料は大人の男性が最も高く、ペットが最も安くなっております」

マユナがそれを受けて発言します。

「一つお尋ねしますが、この子がいるから貴方はペットのお話を？」

入国審査官「あまりマユナと年齢の変わらなさそうな男性でした——が答えます。」

「いいえ。入国する全ての方に説明している内容です。人間全てが人間として扱われるわけではないのですから」

その言葉に、マユナを始め入国手続きをしている九人は一斉に疑問符を顔に浮かべます。

「詳しく説明いたしますね。我が国の国民は基本的に年齢に関係なく人としての自由、要は権利ですね。これを有します」

「なるほど」

マユナが相槌を打ちます。

「そしてそれと同時にそれぞれに果たさなければならない責任があるわけです」

「要は義務、ですね」

マユナの返答に審査官が続けます。

「その通りです。しかし国民の中には義務を果たすのがどうしても辛い、そんな者もいます。病気や障害で学校に行けない、働けない、集団に溶け込めず、弾き出されてしまう、特定の人間にしか心を開けない。そういう人たちです」

「そういった人たちのために権利をある程度制限する代わりに義務を免除する、というシステムがある訳ですね。だから身分の選択が自由な国である、と」

「ええ。その通りです。マユナさんはお話が早くて助かります」

「いいえ」

マユナはひとしきり謙遜をしておきます。

「我が国の制度が周囲に広まるにつれ、様々な方がいらっしやいました。人によっては、人間をペット扱いするなんてとんでもない！ と憤慨される方もいらっしやいましたが、そういう方は立派に人間として生活していただければ良いだけのお話ですので、まあ問題はないのですが」

入国審査官は別段自国の制度を誇らしげに話す様子ではなく淡々と語っていました。

「逆に、この制度は素晴らしい！ と他国からの移民が増えてしまったことは少しばかり問題です。ですので現在はマユナ様をはじめとする皆様を移民として受け入れることにはできません。その点はご了承をお願いします」

「資料にもありましたね。私たちはこちらに居住する意思はありませんのでその点について

ては問題ありません」

マユナがそう口にする、

「でもさでもさ。あんまりにもこの国の居心地が良すぎたらさ。心変わりもあるかもーダダダダダダダダダダダ！」

横から口を挟むマウロのほっぺたを、マユナが延ばします。伸びます伸びます。びろーん。

「ひどい……」

自業自得のマウロを差し置き、マユナが審査官に質問します。

「ご説明ありがとうございます。ところでペットが有する権利と義務については資料に記載がなかったようですが、ご説明願えますか？」

「はい。簡単に説明しますと、入国の際の手数料が安いこと、税金の免除または減免ですね。施設などの入場料の割引、場所によっては無料の場所も多々ございます。一方でペットの入場に制限がある箇所もございますのでご注意ください。更に買い物も税金が軽減されますが、ペット単体での買い物はできません。常に責任者の方の許可が必要です」

「責任者ってつまり飼い主ってこと？」

マユナではなく、マウロが質問しました。

「そう仰っていただいても構いません。ほとんど同じ意味です。一匹のペットにつき一名の責任者が必要になります。その情報は国が厳重に管理しております。ですので旅人の中のお一人が仮にペットとして入国されます場合、責任者とペット、という関係性は我が国の中で滞在されている限りは共有されます。そして出国の際、旅人さんの誰がペットで誰が責任者だったか、という記録は国内から完全に消去される、という仕組みとなっております」

「なるほど。よくわかりました」

そう言うマユナはマウロを見つめます。毛むくじゃらで、触ると非常に柔らかく、抱き心地が最高の翡翠色の冬毛をしたマウロは、ずんぐりむっくりした体を傾けて、マユナの様子を怪訝に見つめ返しています。

「では、大人男性三名、女性三名、子供が二名と、ペット一匹で」

そして先ほどの大絶叫につながります。ナンダッテー。

「いやいやいや。マユナそれはないよ！ ボクはペットじゃないよ！」

「……………」

マユナがマウロを見つめます。

「いやいやいや！ 何をそんな毛むくじゃらだし、言うて全然人間の姿形してないし違和感ない、オツケー！ みたいな顔してるのさ！」

「マウロ」

「何さ！」

「大正解です」

「ナ、ナンダッテー！」

入国審査官が口を挟みます。

「ペットの入国に際しては条件がございまして、こちらにあります二つセットの腕輪の内、鍵のついていない一つを責任者の方に装着していただき、残りもう一つ、鍵がついている方をペットに装着していただきます。こちらは両方とも出国の際に返却していただきます。また、外されますとブザーが鳴り響き、即座に警察に通報されます。また、装着者同士が百メートル以上離れてしまわれた場合も同様です。八十メートルで一度通知のために大きな振動が起こり、装着者に伝わります」

「なるほど。では責任者は私で」

マユナが即断即決し、用紙に名前を記入します。

「まってまってまって！ ボクペットじゃないよ！ トイレ行けないじゃんボク男の子！」

マウロが強引に頭をマユナと机の間にねじ込みながら叫びます。まったく大人しくしていません。全身全霊の抗議です。

「……………」

マユナがマウロを見つめます。

「いやいやいや！ あなた気づくとふらっといなくなつては機械の部品とか勝手に仕入れでは資金難とか言ってくるシメカニクだからって欲しいもの何でも買われたって困るんですよねーむしろめっちゃこの腕輪便利ー、みたいな顔しないでよ！」

「マウロ！」

「何さ！」

「大正解です」

「ナ、ナンダッ

以下略です。そんなこんなで男三人女三人子供二人、そして、

「なつとくいかなあーいいいいー……………」

ペットが一匹、無事入国したのでした。

「ピッキングして外してやる……………」

とか何とか、機械の扱いには腕に覚えのあるマウロはぼやきましたが、

「それでブザーが鳴り響き警察に通報されマユナ様始めお連れの方に迷惑をかけることを

覚悟の上でしたらどうぞ」

と冷淡に審査官に囁かれ、

「……ぐぬぬ」

大人しくなりました。

襖を一枚開けると、蝋燭で仄かに揺らぐ灯りが感じられるの。畳の古めかしいのを足袋越しに感じては、そろそろ張り替え時かしら、じじさまに言わなくちゃ、って思う。燭台の足下に寝ころんでいる御姉様に私は声をかけます。

御姉様、こんな場所で寝てしまつては風邪をひいてしまいますわ。

優しく、ヤサシイク、声をかける。ここは隙間風が吹いてきて、少しだけ肌寒い。こんな場所でも、風が吹き込んでくるんだわ。

ピュウ、ピュウウ。風に乗り私の鼻孔をくすぐる御姉様の髪の毛の香り。私の大好きな、橘の芳香。何と瑞々しいもののかしら。

私は御姉様の髪を手で、指で梳きながら、御姉様の顔を見つめているの。すると、

「……………」

御姉様の大きな瞳が私の顔を見つめ、微笑んでくれる。ええ。私も御姉様が、大好きよ。

——そのまま、私は横たわつたままの御姉様の柔らかな母丁子の花へとめがけ、顔を近づけるの——

甘い芳香と、酸っぱさを感じては癖になつてしまひそう。ああ。ダメよ。御姉様。御姉様の重みに堪えきれず、ついに私は御姉様に覆い被さるように倒れ込んでしまふ。そしてそのまま私は召し物の崩れるのも厭わず、御姉様と肌を触れ合わせるの。

袖の擦れ合う音が一つする度に、私と御姉様は一步づつ近づいていく。襦袢の幅広い首回りに指を差し入れうなじに触れると、御姉様はぴく！と体をうねらせ私を見下ろす。悪戯っ子の私をたしなめるようにして見下ろしては、また微笑み私の体に向けて紅く咲く母丁子の様にその舌根をしたらせていく。そしてそれを受け入れる私。その様子はさながら運命の相手を心から待ち、受け入れる雌蕊のよう。嗚呼、どうしてこんなにも美しいのでしょうか。御姉様。こんなにも、こんなにも御姉様のお体は美しく、あまりにも気持ちよいのです。

その舌根が私を一頻り嘗め回すとその次は私の番。でも、私は最後まで行き着くこともできず御姉様の体に押しつけられて動けなくなる。……でも良いの。今の今まで隠し続けられてきたその花は開かれたのですから。

私もそれを受け入れるの。隠し遂げられたその花冠がお互いに輝き出す様に、私は喜びを禁じ得ません。

もっと。もっとお側にお寄りくださいいな。御姉様。もっと。もっと御姉様が欲しいのです。私は悪い子。さあ。もっとお叱りになって。なつてくださいいな。

国の中に入ったマユナ達一行なのですが、

「……………」

マウロは入国してから常にむっすー、とした顔を崩しません。

「あーあ。ボクは今とってもとおーってもおかんむりなんだからね！ マユナがまさかボクのことそんな風に思ってるなんてき！ ボクのことバカにしてるよまったく！ もう！」

口を開けば自分の扱われ方への不平不満ばかりをぶちまけます。

「……………」

腰に二振りの刀を携えた長身の男がマユナに何か耳打ちしました。マユナはその耳打ちに応じるような素振りを見せずに言いました。

「あらあら。マウロはこれくらいで拗ねちゃうなんて。まーだまだお子ちゃまですねぇ。

私は困っちゃいます」

「困れば良いんだもん。マユナなんて。ばーか！」

口を引き延ばして舌を出し憎まれ口を叩くマウロに対してついに、

「……………！」

鋭い眼光と舌打ちの音が聞こえ、マウロはその瞬間にビクン、と体を震わせてマユナにしがみついてしまいました。

その音と眼光は先ほどの長身の男から放たれたものであることは明らかで、マユナは怯えた様子のマウロを優しく撫でてあげながら、

「ほおら。あんまり静かにできないからマユウが怒っちゃいましたよ」

となだめました。

「お前がさっさと黙らせんからだ。こんなクソガキ風情に何を甘やかした態度を取るか。全く、俺には理解ができません」

マユウにしては珍しい長台詞と一緒に改めて舌打ちをすると彼は明らかに気分を害した様子でその場を離れていきます。その歩みは非常に早く、あつという間に人並みの中に紛れて消えてしまう程でした。その背中をマユナと二人して見送りながら、

「マユウなんて怖くないんだからな！ バーカ！ ベーっだ！」

見苦しい負け惜しみの挑発をするマウロでした。マユウが完全に姿を消すまで、マユナにしがみついたままでした。

他のメンバーは全員で今日の宿探しの為散策をしていました。

この散策は宿を探すという本来の目的の他、安く買えるもの、反対に高く売れるものを見出したり、特産品や名物を知ったり、また治安であったり人の様子等をわかることのできる貴重な時間です。

「意外と獣人族が多いな」

腰に一振りの刀を指した女性が呟くと、

「結構マユナンマウロンの腕輪してる奴居るしねえ。普通なんだねえ」

小柄で引き締まった体にマントを羽織った女性が合わせます。

「けど色が違えな。ありや意味あんのか？」

非常に体のがつしりとした、屈強な男が腕輪の色に興味を示しました。が、

「受付ん時にマユナがあのでブに聞いて色決めてたじゃんか。どこ見てたんだよこの唐変木」

ギース、栗色の髪に琥珀色の瞳をした少年がやや毒を帯びた声で切り捨てました。

「ああ？ お前誰に対して口利いてんだコラ」

屈強な男がその栗色の髪を鷲掴みにして凄みましたが、

『ぴっ！ ぴっ！ ぴっ！』

という笛の音をもう一人の栗色の髪、琥珀色の瞳に咎められて、

「ちっ。キーサ様に言われちゃしようがねえやな。へいへい。お兄ちゃんをいじめて悪かったな」

かなり強引にギースの髪をわしゃわしゃして解放してやるのですが、

「うわ髪の毛ぐっちゃぐちゃじゃん。マジ最悪。ホント勘弁してよこれだから暴力しか我慢がない脳筋って嫌いなんだよ……」

ギースはマウロとひと味違った憎まれ口が減りません。

「アマネ、我慢が肝要」

マントを羽織った方の女性が屈強な男に伝えます。

「わーってんよ。相手はガキだし、腹減って苛々してただけさ」

頭をバリバリ掻きながらアマネは自分と女性陣の荷物を担ぎなおしました。

「そうそう。大人なんだから子供は大切に扱ってよね。その頭で理解できるかどうかかわかんないけどさ」

思い切りバカにした様子のギースを背後にしているアマネは、

「つつても俺もまだ年齢的にや子供なただけだな。この国じゃ大人扱いだけだよ」

そうぼやきます。そのぼやきと同時に、

「お、ありやユータんじゃん。おーいユーターん」

マントの女性が手を振りました。ユータんことユタカは彼女たちとは逆方向から探索を始めて合流したのです。

「で、結果はどうだった」

刀を持った女性が久し振りに口を開くと、



「うん。折角だから予定を変えて隣のブロックから走って探索開始したんだけど……」

「隣のブロックからやったのかよ……」

マントの女性が驚き半分呆れ半分で口にしましたが周囲はわかりきったこと、とスルーします。

「そっち側のブロックから一つ、それとこっち側からも一つ。良い感じの宿を見つけたよ。

どちらも今は部屋数に余裕がある。これが通信番号」

そう言ってからメモを刀の女性に手渡します。

「ていうかさ、うちらまだこのブロックの半分も行っていないよな」

ギースの言葉に、

「大体三分の一ってとこだろ。つてことはユタカ兄さんは……」

アマネが合わせ二人でユタカを見ると、アマネよりはずっと小柄で華奢な雰囲気を持つ彼はにっこりと微笑み、

「隣のブロック一周とこっちのブロック三分の二、かな。距離にして大体三十七、八キロ。

これくらい朝飯前だよ」

息切れなど一切なく淀みなく話し笑うユタカに、

「……………」

「うわキーサが放心してるよ」

「言い切る感じがまたヤベェよなユタカ兄は……」

男二人と女の子は息も切らさず微笑みを絶やさないユタカを見てはもう呆れて言葉も出ない様子なのでした。

その後また宿について話し合い、隣のブロックが貧民街となっていて治安があまり良くないことを踏まえて多少値は張るがゆっくり休めるであろうこちら側のブロックにある宿を予約しました。偶々ですがペットが一匹いたお陰で宿代は思うよりも高くなりならず、

「これならマユナの姉さんも眉間に皺を寄せずに済みそうだな」

「ぶっちゃけマユナって守銭奴だしね」

「ちげーねえや。カカカツ！」

アマネとギースがひそひそと話をしていると、

「あ、マユナン？ 今の男どもの会話聞こえたー？」

一行の中でメカニックを勤めるペット謹製の通信機を口元に当ててマントの女性が口にする、

『もうしわけありませんでしたー！』

ユタカを除く男どもはその場でひざまずかんばかりの勢いで詫びを入れるのでした。

さて、このような調子で報告を受けたマユナとマウロでしたが、この通信を切った瞬間

に、

「やあ。こんにちは旅人さん」

そう言いながらにこやかに声をかけてくる男性がいました。

あれからどれくらいの間が経ったのかわからない。その時間は永遠、は言い過ぎかもわからないけれど、本当にとんでもない時間が過ぎ去ってしまったようにも感じられたし、ほんの数分くらいしか経っていないようにも感じられる。あぁ。

ほんつとうに御姉様と過ごす時間は本当に享楽の極みと呼ぶにふさわしい。いいえ。そんな言葉にして一言で言い表してしまうことがあまりに惜しい一時。私達はいつの間にか二つの体という障壁すらも乗り越え解け合っていく。御姉様と私の上気した息づかいは互いの呼吸に相まり、私の吐息が御姉様を形作り、御姉様の吸気に私は形成されていくの。

はぁ。あぁ！ 何て、何ていう心地よさ！ 私はこの一時を越える一瞬も、言葉も知らない！

汗とお互いの体を、入れ物を作る液体にまみれたその身と吐息を笑顔で整える間もないまま、私と御姉様は埋もれていき、そして夜を越えるのでした。

その夢のような一時が本当に夢になってしまいうような時間が経った頃、私に声をかけてくる存在がありました。その声はあまりに無粋で小汚い。御姉様とは小汚さと対極にある存在。その声が一枚の紙をひらひらさせながら私に言葉を落とします。

「次のご一行様はこちらだ。どうだ？ お前のお眼鏡に果たして適うかな？」

私はその紙を見て、仕舞いには笑っていました。今までずうっと黒い髪をした御姉様ばかりを愛でていたけれど、そこにいるのは、栗色の髪と琥珀色の綺麗な綺麗な瞳。あぁ。何て美しいのかしら。その近くにいた、黄色の髪と碧色の瞳も捨て難い。決めたわ。

「じじさま。私、この子とこの子、あと、この子もいいわ。そうね。いつもみたく切っちゃえば、同じことじゃない……ね？ おじさま？」

私はその紙を突き返して言うわ。そうよね。だってこんな紙を百も二百も集めたって、その当人一人になったりはしないんですもの。私はまた御姉様を見つけるの。とても優しく、私のことを愛してくれる御姉様を。

「やあ。こんにちは旅人さん」

にこにこした顔でマユナに話しかけてきた男性は、この国に入ってから初めて声をかけてきた相手でした。マユナはマウロに一旦離れるよう手で指示を出して挨拶を返し、一言二言会話を交わしました。会話の中で医者をしていると判明したこの男性は非常に紳士的で非の打ち所のない態度でマユナ達に接します。見た目が人間でないマウロに対しても、

その態度は崩れることがなく、ついにマユナはストレートに、

「この国の方は、失礼かもしれませんが私達にあまり話しかけてくることもなかったのもしかしたらあまり外国からの客人に興味を示さない方が多いと思っております」

そう言いました。男は、

「ええ。入国審査の際に公務員の担当者から言われたかも知れませんが、一時期移民が大量発生したことで問題になったくらいですし、外国から人が来ることが実際珍しくないですよ。だから、というのもあるのでしょうかね」

笑顔は崩さず、世間話のようにして言いました。

「ところでマユナさん。私はこの国で医者をしていますから、獣人族の子供を含め沢山の患者さんを診てきました。どうです、健康診断という形で皆さん我が病院に訪れてみてはいかがでしょう？ 見たところお二人はペットと責任者の関係の様ですし、お値段もかなり安くなりました……」

マユナが微笑む様子を見たマウロがまたビクン、と反応すると、

「おー。マユナがナンパされてるー」

そんな呑気な発言をするマント女性をはじめとする一行が合流するのが同時でした。そこにはいつの間にか合流していたマユウもいました。

「おや。皆さんお揃いになりましたか、今丁度私が経営している病院で皆さんの健康診断についてお話をしていたところでした。どうですか？ 皆さん是非！」

医者 of 男性が病院の住所や電話番号の載ったチラシをマユナに渡し、受け取ったマユナが微笑み折り畳んで懐に納めたのを見て言いました。

最後まで医者 of 男性は微笑みを崩すことがありませんでした。立ち去り姿が見えなくなるまで。

「ねえ、マユナは気付いたと思うけど」

マウロがマユナにしがみついたまま言いました。

「ええ。あの人は人間の見た目ですが獣人族ですね」

マユナが返事をする、

「あと、マユナ名乗ってないのにあいつマユナの名前当てたし、全員揃った時に皆さんお揃いになりましたか、って言ったよね。あれオルエゴかも」

マウロが続けて怪しむように言葉を続けました。オルエゴ、というのはマユナの出身国の言葉で、普通の人間ができないような特殊なこと、例えば地下の水脈を言い当てるだけ、というような地味なものから、触れたものを軒並み刃物に変えてしまうような戦闘に適したもので、魔力、精神力に関係なく発揮される能力を言います。

このオルエゴは、基本的には人間ではなく獣人族に備わっているもので、獣人族にも名

前通り獣の姿をしている者から、人間と全く違わない見た目をしている者まで様々です。しかし、能力が能力だったりするので、オルエゴが判明してしまうと弾圧の対象となってしまうような国もたくさんあります。

「ていうかさ、ボクは獣人族じゃないのに！」

マウロがふてくされたようにしつぽを地面に打ち付けて言いました。

「つまりあの人の言動はオルエゴではない、ということでしょう。私達が情報を喋った相手は入国審査官だけ。あなたが獣人族でないことは伏せましたから普通の人から見ればあなたは獣人族にしか見えない訳です」

「じゃあ何であのおっさんは俺たちのことあんなに知ってたのさ」

ギースが尋ねると、

「国の医者等の特別な立場にある人は私達の情報を知ることができる、と考えるのが普通でしょう。目的までは知りませんが、でも良い情報が私にも入ったということは間違いないですね」

マユナは答えました。マウロはマユナから離れました。ズザザ、という音がするほど素早い動きは見た目の鈍重そうなイメージを覆す感じがいたします。

「……………」

「……………」

マユナとマウロが見つめ合います。ロマンティックなキラキラが舞い散り踊り出すエフエクトもかかりそうでしたがマユナは手を顔の前で振って言いました。

「いやいや。大丈夫ですよ。今日は行きません」

「今日、『は』？」

「はい。今日、『は』」

その瞬間マウロの瞳から光が消えました。が、誰もフォローはしませんでした。

「ま、頑張れよ。どうせお前のことだからデブって言われて痩せろって言われるに決まってるけどな！」

嫌みったらしくギースが言うと、言い返したのはマユナでした。

「いやいや。何を言っているのやら。ギース、あなたも明日受けますよ。健康診断」

瞬間、ギースの瞳からも光が失せました。抵抗はしませんでした。デブ、と呼べるようになんぐりむっくりマウロを片腕で押さえ込むような、見た目の華奢さとは途方もなくかけ離れたマユナの怪力を知っているギースは、

「この世に、光なんてないんだ……」

とまるで壊れた機械のようにつぶやき続け、例の宿について受付をしている最中にもぶつぶつと言いつづけるほどでした。

「……………」

宿の受付担当が顔にクエスションマークを浮かべている中、マウロとギースはひたすらにつぶやき続けていました。

この世に希望なんてナインダーツ！

もはや、つぶやいてなどいませんでした。叫んでました。

翌日、マユナの傍にはマウロが、いません。

「……………」

離れすぎを伝える警告の振動が起こるまでマウロはマユナと距離をとって近づこうとしません。

「起きてからずっとこうなの？」

ユタカがマユナに訪ねると、

「はい。ちなみにギースもです」

マユナが目線を向けると、

「うわなんかこっち見てきた気持ち悪っ！」

目を背けて憎まれ口を叩きつつ、マウロと一緒に宿の朝食を食べています。普段は二人で口げんかを頻繁に起こすのですが、こういう時に限って仲良しこよしです。

「困ったものです」

マユナは口ではそう言いましたが、

「顔が笑ってるよ」

ユタカが指摘しました。マユナは不思議と嬉しそうな笑顔のままでした。

朝食を摂り終り移動を始めるとマウロはマユナと一定の距離内にいなければなりません。ちょっとじっとしていればヴヴヴ。少しだけ歩いてじっとしてまたヴヴヴ。そしてまた歩いてじっとしてヴヴヴ。四回くらい繰り返して、

「いい加減にしる！」

アマネにゲンコツを食らってしぶしぶ歩き出しました。腕輪がないギースはマウロとは関係なく歩かなくなっていましたか、

『……………ぴっ！』

耳元で短くうるさく笛を鳴らされた挙げ句、

「何だよお前注射怖くねえのかよ意味わかんねえよ……………」

妹に腕を引っ張られてしぶしぶ歩く有様なのでした。

「女の子は……………」

マユナがそう一言発すると、

『びびびびび！』

キーサが合わせます。

「度胸より愛嬌だよ。カワイゲのない女の子はモテないぞ〜っだ」

マウロが拗ねたように言うと、

「あら。まるで私やキーサに愛嬌がない、みたいな言い方ですね？」

即座にマユナが反応しました。

「……あると思ってるの？」

「……あるとでも？」

二人の発言が一致しました。その後は一瞬でした。キーサが空気を読んで瞬時に掴んでいたギースの腕を離します。腕輪の振動機能がギリギリ起動しない距離を保っていたにも関わらずその間合いを一瞬で詰めたマユナは、

「はいはい何を注射が嫌だなんて無駄なこと仰ってるんですかほら行きますよ！」

顔はにっこにこ笑いながら、目は一切笑わずに二人をずるずると引き摺ります。

「うわっ！ ちよっ！ マユナ怪力すぎっ！」

マウロとギースはその力に反抗できずにズリズリズリ引き摺られてしまうのでした。そうしてたどり着いた病院内は本当に立派で、とても昨日の男が一人で経営しているようには感じられない程でした。ここでは大人も子供も、獣人族までもがほのぼのした雰囲気を漂わせて順番を待っているのです。瞳の輝きを失っていた一人と一匹もそれを怪訝に思っている様子です。その理由を手続きを終えて戻ってきたマユナが一人の獣人族の大人に訪ねると、

「ここのお医者さんはやっぱりプロだね。注射も痛くないし、何より俺たちを差別しない。だからちよっとはかり長い時間待たされても俺達はここを選ぶのさ」

という風に答えてくれました。ちなみにここには昨日の男、院長以外にも医者はいるようですが、獣人族と旅人に関しては院長以外が見ることはできないらしく、必然的にマウロ達は長蛇の列に並ばされることになってしまったのでした。

明らかに気分を害した様子で睨みつけるマユウに対してもマユナは、

「日々の健康のためですよ」

という風に笑顔で言っただけでした。

結局その順番は病院が閉まる時間を過ぎてしまう程の時間となってしまう、マユナ達は順番待ちの一人を置いてローテーションで観光をしていたのですが、

「もうこの近辺で見たいところは見終わったかな……」

「さすがに長すぎ……」

という不満の声が大人達からも漏れ出てしまいました。それに乗じた瞳の光がない少年とペットが帰ろう帰ろうの大合唱をするので、マユナは抑えるのに苦労した様子を呈して

いました。そんな時、でした。

「いやあ。大変長い時間お待たせしてしまつて申し訳ありませんでした。マユナさん達がしびれを切らして帰つてしまわれたのではないかとビクビクしておりました。アハハ」

院長は軽く笑うと、一行を招き入れました。診察室を通り越して、階段を下った地下室へと。

それに違和感を覚えたマユナが訪ねると、

「いやあ。さすがに診察時間を過ぎてしまひまして医者や看護師達を帰してしまいました。申し訳ありません。その代わりと言つては何ですが、私の娘が診察のお手伝いを致します。いや、腕は確かなのですが、どうしても人前には出たがらないものでして。今回はそちらのペットさんがいることで娘が興味を示しましてね。それではどうぞ」

そうして通された先には、

「お待ちしておりました。皆様方」

朱の艶やかな着物に身を包んだ、

「女の子？」

『ぷぷぷ。』

娘が三つ指をついて出迎えるように座っていました。マウロの声とキーサの間の抜けた笛の音が示すように、その姿はまだ幼く、ギースやキーサと変わらないくらいの背格好でした。

ああ。ついにこの時が来た。来たわ。私の目の前には琥珀色の瞳。栗色の髪の毛。嗚呼。何と可愛らしいことなの！ 愛らしくて、今すぐにでも……食べてしまいたいくらい！

片一方は無粋なモノがぶら下がつてはいるけれど……。大した障壁ではない。このくらの年齢ですもの。切り取つてしまえばいいの！ そう！ ざっくりと！ いつも通りに！ ああ。それにしたつて何て可愛いのかしら。

二人を庇い立てするするように立っている黄金色の髪の毛の娘も、やっぱり二人ほどではないのだけれど、碧の瞳が眩しいわ。こういう人って、やっぱり私の御姉様にふさわしい！ 傍にいる毛玉は御姉様とするには話にならないけれど、良い毛皮。あの肉厚の肥満体はクッションにするには丁度良い。

その他はゴミよゴミ。美しくない。適当にバラして、後はじじさまに任せるのが良いわ。いつもの様に。そう。いつもの様に。

ではまずマウロ君、君から始めよう。院長の発言と共に、異様な雰囲気と娘の異常な殺気を感じて診察即ち注射を免れると信じていたマウロが、

「ヤダー！ 殺されるー！」

と叫び速攻でマユナにバシッと頭を叩かれました。

「謝りなさい」

即座に謝罪を求めるマユナに、

「待ってよマユナ何も感じないの？ これ絶対おかしいって！」

と異議を申し立てるマウロでしたが、

「はっはっは。大丈夫大丈夫。ちよつとだけ血を抜くだけだから」

「そうですよ。じじさまは国一番の名医です。心配なさらずにいらしてくださいな」

院長と娘がマウロを宥めるようにしています。

「ああマユナさんとギースさんキーサさんはそちらでお待ちください。まずはマウロ君を終わらせてから、大人の方々を順番に診察して参りますので。あと、この部屋の対角線の先端は百メートル以上離れています、今マウロ君が居る場所からはどれだけ離れていただいても大丈夫です」

そう院長は言うのと、診察室と書かれた部屋の襖を閉めました。待合いのスペースには、マユナとギースキーサ兄妹、そして。

「……では、私とアソビマシヨ？」

細かな針を指と指の隙間に複数はさみ、無邪気に笑う院長の娘だけが残されました。

ちい。予想はしてたけどそれ以上に素早い。薄暗い部屋の中、三人揃って見え辛いはずの私の針を見切ってくる。

「馬脚が思ったよりも豪快に現れましたね」

『びいびい』

黄金の髪と栗の髪が会話しながら軽快に跳ねている横で、

「ねえ待ってよ。どうしていきなりこんな命狙われるような展開になってる訳？ 俺こんな

なの聞いてな、危ねっ！」

せめてそのフグリさえ無ければ、というおしい雰囲気時々漂うもう一人の栗色の髪。こっちからまずは手に入れてしまおうかしら。

「あの針は毒が塗ってありますから注意してください。あの子も素手で触っている以上恐らく麻痺するくらいで済みますけど、当たらないに越したことはないですよ」

暢気に解説をしながらゆっくりこちらに近づいてくる黄金色の女。ああ。うざったいわ。これだから意志を持って動く存在は嫌いな。

「ていうかこれ向こうにも、危ね！ 聞こえてる！ ダっ！ はずだろっ！ うわっ！ つか！ 俺ばっかり狙うなくそ女が！」



最後に私に向けて杖に見せかけた洋剣を投げつけてくるもう一人の方の栗色。その抵抗も、やっぱり可愛らしい。まるで屍臭花に捕らわれた羽虫の純粹無垢な生への執着。固執を思わせる。

まるで見当はずれ。あさつての方向へ飛んでいった洋剣を私は見やりもせず、薬瓶に漬かった細針を投げ込み続けるの。さぁ。もつと。もつとよ。もつともつともおつと。美しい光景へ私を連れて行って！

マウロの体はシートベルトの豪華版みたいな太いベルトで椅子にぐるぐる巻きに締め上げられていました。そして右腕がゴムチューブできつく締め上げられていて、

「では、まずは採血から……」

院長の冷たい声が降りてきます。

「にやーッ！ 逃げられないっ！ 逃げられないっ！」

マウロが全力で叫びましたが、それも虚しく、針が刺さり、ませんでした。

「さて、ちよいと話があんだけだよオ……」

アマネの持つ特殊な形状の槍が、院長の喉元に突きつけられていました。

「おやおや。穏やかではないですねエ……」

院長は院長で、非常に穏やかで、落ち着いた声を返します。

「お前、何者だよ」

そのままアマネが尋ねると、

「何者か、と問われましても、私は医者でしかありませんよ？」

笑顔のまま院長は顔をマウロからアマネへと移し、答えました。

その時、微かに、ではありましたがこんな声が聞こえてきました。

「ねえ……よ……なり……なてん……に……俺……危ねっ！——

それを受けてアマネは詰問の口調を強めます。

「向こうも向こうで穏やかじゃねエ様だが……もう一回聞くぞ……！ てめえは一体何なんだ！」

院長は一度、何かに観念するかのような穏やかな表情で目を閉じ微笑むと、カツ！ と

目を見開き、

「私は……蛇だよ！ 医を扱うにはふさわしい獣人だッ！」

は虫類を思わせる、縦長の瞳孔と蒼色の瞳を見せつけて叫びました。それを見てアマネは一瞬だけ驚き、マユウの方をチラリ、と見ました。

「……………」

マユウの応答は首を振るだけで、その意味はアマネ以外には理解しかねる様子でしたが、

「次の質問なんだけだよ。蛇野郎」

「蛇野郎、とは心外だ。一体何を思っただけのような発言を？」

「気を害した様子ではありながら、それでも紳士的な態度を崩さず院長はアマネに言葉を返しました。」

「バカな俺でも採血は空の注射器でやるのは知ってるぜ？ お前その中に何を入れてやがる」

アマネがそう尋ねた直後、

「……あ！ ホントだ！ 何その微妙な液体！ 意味わかんないんだけど！」

マウロがばたばた暴れようとしながら指摘していますが、体が動きません。

「おい！ 離せこのヤロー！」

院長はマウロの喧しい叫びを聞いても我関せず、という感じで、

「やめたまえ。強引に打ってしまうことも簡単なんだよ？ そもそもそのベルトは私が持っている鍵がなければ開かないんだ。観念したまえ」

そう冷酷に吐き捨てます。

「……できる、もんなら！」

マウロはそう言うのと体を固めます。硬体術と呼ばれるマウロの能力で、普段もつふもふの柔らかい体毛を完全に異質な状態に固めてしまい防御に使ったり、逆にその尖った状態を駆使して攻撃したりできます。

「ほお。そんな能力があったとはね。しかし強引にベルトを切るのもダメだ。それと同時にこの部屋が同時に爆発してしまうよう仕掛けがしてあるんだよ……ふふふ」

院長が気持ちの悪い笑みを浮かべると同時のことでした。ブオン、という風切り音がして、

「……ッ！」

アマネが間一髪。背後からの攻撃を避けます。

「危ねえなあ。オイ！」

いきなり槍で突いたりはずせず、足蹴にしてその少女を吹っ飛ばします。屈強な肉体を持つアマネです。武器を使わなくても相当な勢いをつけて少女は転がり壁に叩きつけられます。相当なダメージを負っているはずだ、と誰もが思いました。しかし、

「……………」

少女は何も感じていないような呆けた顔のまま立ち上がり、そのまま一瞬の内に間合いを詰めます。

「クソッ！ 気持ち悪い。どうなってんだよ？」

アマネが吐き捨てました。

金属針を避け続ける三人も、ついに気付く時が来た。

「ねえ。見間違いかと思ったんだけど、さ」

『びーっ』

「見間違いな訳がないじゃないですか。その通り、ですよ」

「何で向こうまで三人いるんだろうなあ！」

手始めに動けなくすると決めたもう一人の方の栗色が叫び出す。もっと叫べばいい。その可愛らしい声が枯れてしまった後に、苦しみの嬌声を荒々しく上げるその瞬間を私は望んでいるの！

「どうしてあなた達は大人しく刺さってくれないの？ もう私も遊びには飽きちゃうの……。もっと、先に進んで私とイイコトをしましょうよ」

思いの全てを、要約しきれないあんなことやこんなことをじじさまに教わった風にして伝えていく。この針と、声で。

「遠慮致します」

『びいびいびっ！』

それでも疲れを見せずに避け続ける二人と、

「あーくそっ！ いい加減疲れるっての！」

という言葉が漏れ始めた一人。ああ、あともう少しなのね？ 私が期待に溢れた目でこの子を見つめると、

「……………！」

醜く無粋な音をたててお人形の上半身が吹き飛んでくるのが同時。そして、

「こいつら……臓器が綿ばっかり……？」

という、この一行の中でも一番醜い、不細工な男が呟くのが聞こえてくる。ああその声だけでも耳が腐るわ。

「けど外側は完全に人間だな……」

刀を構え残心の構えをとる女の声が聞こえる。さっきのブサ男よりは幾分マシだけど、やっぱり無理！ 気持ちの悪い。落ち着き払ったその声が虫唾を走らせる！ 黙れ。黙れ。黙れ！

「……………。さぞや、お高く売れたことでしょう、ね」

黄金色の髪の少女が呟くと、

「ああ。まあ有効利用と言った所だろう。無駄がなくて実に良い。素晴らしいとは思わんかね。どの道放置すれば腐れてしまうのだからね」

「……クソが」

「……キツシヨイ、な。私その思考は理解できないわ」

一番の糞虫が吐き捨て、またさつきとは別の、マントから柳葉刀を多数取り出ししている女が呟くと、

「これはまた心外だ。私達は診察をして、その礼をありがたく受け取っているだけさ。もののついでにな」

じじさまが答えた。じじさまの声も、私には気持ち悪く聞こえていて、苦痛だった。

「狙うのは基本、いいえ。絶対にペットを連れただけの一行のみ。それが実際に獣であるかどうかは問わない。何故なら、この国はペットが行方不明となっても熱心に捜査が行われませんものね。責任者と百メートル以上離れると通報が行われてしまいますが、そんなのは責任者と同時に始末して行方不明にしてしまえば良いだけの話です」

マユナが言うのを、診察室に一人取り残されたマウロが聞いていました。

アマネに襲いかかる元人間を、マユウが真っ二つに切り捨て、その上半分をアマネが蹴り飛ばして出て行ってしまった為にひとりぼっちになってしまったのです。

「私達がここに来る直前訪れた国にも、一人名医がいらっしゃったそうですよ」

二つに分かれた元人間の体を追って診察室を出た院長に向かって、マユナは言いました。

「ほう。それはそれは」

院長は事も無げにそう答えましたが、

「ですが、そのお医者様は国外に逃亡してしまっただけなんです」

「なるほどなるほど。ところで今破壊された襖や傷だらけのこの待合室については弁償してもらわなければなりませんね……残念ですが」

院長が話題を切り替えていくと、

「そんなつもりもないのにずいぶんわざとらしいことを仰いますね。件のお医者様はその国の女の子や男の子を親ごと丁寧に診察するような素晴らしい方だったそうですが、しばしば、主に女の子が行方不明になっていたそうですけど……。おや、どこかで見たようなお話ですね」

マユナはすっぱりと話を切つて落とす話を続けます。そして院長は観念した様子で、

「しかし最後はヤキが回つてこのザマ……。男は娘を連れて国外逃亡。そしてこの国に医者として移住しようとした。まあ最初は国も頑として受け入れなかったが、この腕前を見せれば、あつという間に手のひらくるり、さ」

答えました。

「後はこの国のペットの制度を巧く利用して犯行を繰り返していった。遺体は娘の玩具、中身は売買。まったく、笑いが止まらない」

普段口をきかないはずのマユウが呟くと先ほど切り捨てた上半分を掴み上げました。その瞬間、その右腕に握られていた鉈がマユウを襲います。

「ふっ——」

軽い息を吐く音がマウロの耳にも届きます。——マユウの動きはマウロの背中側で繰り広げられているため彼にはその動きの子細が見えませんが——

(別にこれくらいで死ぬ訳ないし……)

そう思っただけでありませんでした。

「ていうーかさあー。誰かボクのこと助けてくれませんかねー？」

呟いてみましたし、多分誰の耳にも聞こえたと思いますが、

「今日のボクの活躍はゼロでしたー。めでたしめでたしいー」

総スカンを食らった形でマウロはいじけたように呟くのでした。

実際にマユウは、軽い息を吐く音と同時に右腕を別離させ、地べたに落ちたその顔面を踏みつぶし、中の綿が潰れる気色の悪い音を響かせました。

「しかしどうしてこんなことをされるのか、不思議ですね」

マユナがそう呟くと、

「簡単なことさ」

院長は未だ不敵な笑みを浮かべたまま、何でもないようにして言いました。

「どんなに変わった嗜好を持つていようが、それがどれほど度し難い存在であろうが、娘は愛しい。我が子は可愛い。それだけのことなんだよ。……君達には理解できんだろうがね！」

その叫びと共に、襖という襖が開き、そして床下、天井からもたくさん人間や獣——だつたはずのモノ——がマユナ達を襲います。

「死体を操るのが貴方のオルゴ。あなたの国ではさぞ扱いづらかったでしょうね」

マユナが言うと、

「ああ。まあそもそも人を生かすのが仕事の私が人前で多用するような能力でもなかったがね。でも、娘は喜ぶのだよ。御姉様。御姉様ってね」

院長の言葉に、マユナはなるほど、とひとりごちた後、襲い来る死体を次々に投げては極めていきます。しかし、

「無駄だよ無駄！」

痛みを感じず、関節を痛めようにもそもそも関節自体を摘出された存在である死体達は、平気で起きあがってきます。

「チイツ！ やり辛え！」

師と仰ぐマユウはあっさりと死体を切り捨てましたが、アマネはその方向へ踏み込むこ

とができないまま攻撃を凌ぐだけで精一杯になっていました。

「それで構わない！ アマネはそれで良い！」

マントの女性がそうやってアマネの姿勢を支持すると、

「どうせ微塵に斬ろうがああ医者を殺さん限り無駄なのだからな。むやみやたらに数を増やす必要もあるまい」

アマネも院長が持つオルエゴのその特徴を掴んだか、基本的には攻撃を凌ぐだけになりました。

「どうする？ このままではじり貧というものだ。くく。貴様等の旅もここで終わりだなあ？」

院長が今まで見せたこともないような下卑た笑みを浮かべながら言うと、

「いいえ。残念ながらそうでもないですね。私達はまたすぐに出国致しますよ」

マユナが弓をつがえて言いました。

「……はっ！ そんな弓で何ができようか」

院長は身近にある死体達を使って自らにバリケードを作り上げました。

「別段戦い慣れている訳でも、ないんでしょうね。そう思っていましたよ」

マユナはそのままつがえた弓の狙いを――

――がっ！

娘の方に変えて、そのまま手を離しました。

「がっ！」

何が起こったのか、全くわからないまま、私の足を見ると、

「なん……？ 刺さって、る……？」

弓矢が一つ、私の左足を貫いていて、それはそのまま床を打ち付けている。

「う、う……？」

動けない。だけではない。口が上手く動かさなかった。

「やはり麻痺の薬でしたね。そこでしばらくしびれていてください」

黄金色の髪が喋り、私は反対に喋れなくなる。ああ！ こんなはずでは、なかった！ のに！

「ああ！ ああああああ！」

じじさまが思わず今までの御姉様でできた壁から出てこようとすると、としゅん、と音がして、弓が放たれてしまう。

「そこから出てくると撃たれますよ？ 大人しくしててくださいいな」

黄金色の髪が生意気にもじじさまに指図をした。

「何が、何が望みなんだ……」

じじさまが喉を詰まらせながら発すると、

「私達は先ほど申し上げた国から仕事を引き受けました。その内容は貴方。……要は国から不法に出国してしまった名医の、出国時国に返却しなければならぬ医者証明のシンボルを回収することです」

「ふ……くく」

じじさまは鼻で笑い、そして声にも出して笑います。

「あんな見た目だけが豪華な飾りに一体何の価値があるというのか。そんなものにたかだか旅人まで駆り出すとはな」

バカにしたように言うじじさまに、

「待ってよ。それはつまりその目標達成のためだけに……」

黄金ではなく、もう一人の方の栗色髪が喋ってから、

「ええ。つまりはそういうことですね。うまく行けば健康診断を受けられたかもしれないのに……。思っていた以上に簡単に出てきてくれたものだからありがたかった反面、残念ですよ」

黄金色が返した。

ああ……。もう体は動かないのかしら……。？ 余りにも、おしい。あの体はもう二度と私のモノになることはない？ あの美しい栗色の髪と琥珀色の瞳……。私の意識がはつきりした状態で、是非とも私のモノにしたかった……。のに。かくなる上は！ そう思い私は足下に転がる鉈を手に取り……

「いけない！」

それが私の耳にした最後の言葉！ さようなら！ 私の美しい日々よ！

鮮血が吹きだし、部屋の襖、畳、机。ありとあらゆる物を朱く染め上げて、娘が事切れました。マユナが、

「……………」

無言でうつむき、思い直して顔を上げて、数々の死体でうずたかく積み上がった壁の向こう、院長の方を向きました。

「そ、んな……あの子が、あの子が、逝ってしまったあああああ！ あの子が、あの子がああ！」

我を失い喧しく絶叫する院長を、

「終わり、ですわね」

マユナが一瞬の内に組み付き、静かにさせてしまいました。

院長のポケットの中にはベルト解放の鍵があり、診察室の壁には、

「こんな物の何にしがみついていたんだか」

蛇に象られた金ぴかのレリーフがありました。

「別に私達は貴方達を捕まえるのが目的だったのではなく、あの国の人間が関わっていた証拠となるこのレリーフだけ回収できれば、後はどうでも良かったのですが……。まあ良いでしょう。警察を呼んだらもうここには用もないです、ね」

一頻り周囲を見渡したマユナが完全に気を失った男を解放して言うと、そこで、

「……あ、私警察の通信番号を知らないんですけど、誰かご存じですか？」

思い出したように言いました。そして誰も存じ上げないことを知ると、

「仕方がないですね。この対角線は百メートル以上あるはずですから……」

自らの腕にはまっている物を見つめながら不本意そうに呟きました。

そして医者の方は駆けつけた警察に連行され、地下の遺体達も娘と一緒に国の死体処理班にあらかた布を被せられた後担架に乗せられ運び出されてゆきました。

「これで皆穏やかに眠れると良いね」

とようやく解放されたマウロが尻尾を振りながら呟くのを、マユナとキーサがただ黙ってなでていました。

その様子をあまり面白くなさそうに見つめるギースが言いました。

「ねえ。あいつのオルエゴって結局何だったの。マユナ言ってたじゃんさっき。いけない！  
って」

ああ、そういえばそうでしたねえ。マユナはマウロから手を離すと、そんな風に気のない返事をしていました。

「ま、いいですよ。付き合ってもらえせんし」

そう続けるとマユナは手を振り現場から立ち去ってしまいました。その場に取り残される形で立ち尽くしていたギースキーサ兄妹やマウロには国の人間は話を聞くことができず、追い立てられる形で病院から出て行く羽目になってしまいました。

警察の取り調べは成人男性組が担当して受け答えし、事のあらましを説明しました。マユナ達が腕輪の警報を鳴らしたことであったり、証言の信憑性など様々な問題点はありませんが、国内も警察達も男の臓器売買やペット誘拐及び殺害にばかり気を取られている様子でしたので、うやむやになってしまいました。

女性陣と子供、そしてペットはというと、

「よーやくボクはペットから解放される！ この腕輪ともオサラバさっ！」

嬉しそうに腕輪の付いた右腕を振り回していたり、

「どーでもいいけどさ、さっさと荷物まとめてくれない？ お前にお似合いの腕輪との別



れを惜しんでる暇とかないんだし」

憎まれ口を叩く声に反応してがぶり。マウロがギースに嘔みつく様子を見たりしながら順調に出国の準備を整えていきます。

「ただいま。みんな」

そうこうしている内にユタカをはじめ、男性陣三人が帰ってきました。手には何か色々な物が上品とはお世辞にも言えない感じに詰め込まれた紙袋をぶら下げていました。

「なににこれこれー？」

マウロが荷物の整理をぶん投げて紙袋をひったくるようにして取ると、マユナと目が合いその微笑みの余りの神々しさに、

「……………こほん。おかえりなさい。ユタカ。この荷物お一つ私にくださいな」

咳払い一つ、マウロなりに丁寧丁寧に重ねた一言を発して、その返事をユタカがする前に袋を開けてしまいました。おしい。ユタカは笑顔の裏で思いました。マユナは粗品、と書かれた包み紙を横目に入れて、どうせ文字通りの品なのだろうと思ひ、

「うわっ。何これ。宿で出た不味いクッキーじゃん。ボクこれいーらなーっ」と

袋にごそごそ戻すマウロを見て、やっぱり。と思ったのでした。

「姐さん。俺が持つてるのは一応現金ですわ。こいつはいただいたときましよう」

アマネが報告するとマユナは静かに頷き、その紙袋を丁寧に自らの荷物の中に移し替えます。

「あいつらはオルエゴ自体を信じられないようだな」

マユロが既にまとめ終わっている自分の荷物を確認しながら吐き捨てると、

「目の前で見たというのに、ですね。……しかし、初めて見る物を信じられずに疑ってしまふことなんてよくあることですよ」

最後に自分の荷物をまとめて担ぎ上げると、マユナは部屋を出ていきます。その後を一人、また一人続いてゆきます。

「だからってさあー。折角のアドバイスをスルーしちゃうってのは頭悪過ぎでしょー？」

マウロが不服そうに言いますが、皆黙ったままでした。マユロだけが、マウロを睨みつけてまたマウロを黙らせました。

宿の料金を支払った後、外に出てマユナが発した第一声は、

「望んでいた訳ではないですが、最終的に入国前との比較で黒字ですよ。とりあえずはそれで良いんですよ。マウロ」

そんな声でした。

「さっすがしゅせんどだね。マユナ」

そう言うのと、アマネとギースの顔が引きつります。バカ！ お前！ 二人が頑張ってる

声で言いますが、それもすっかりマユナには聞こえています。その上で、

「その言葉、誰に教わりましたか？」

神々しい笑顔で訪ねました。

マユナ達が出国してから数日後。国内の新聞がセンセーショナルに報じたニュースがあります。

『連続猟奇殺人か！？ 凄惨な現場に悲鳴轟く』

そんな見出しの報道が伝えるには、夜一家が寝静まった後に何者かが侵入し、その家の子供が惨殺されている、というもので、その遺体は内蔵が露出するまで切り刻まれる痛々しい状態だったそうです。

もう一つ、新聞等は詳細に伝えていないようですが、現場となった部屋の壁には、必ずこんな言葉が、犠牲者の血と、数日前に死亡が確認されたのにその後行方不明になってしまったとある女の子の体液が混じった液体で書き残されているそうです。

『次ノ御姉様ヲ、サガサナキヤ』と……。